



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2016/04/03(日)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 177

第41回 北海道ミニバスケットボール大会 兼

第47回 全国ミニバスケットボール大会 北海道地区予選会

若山 茂樹

【観衆を引きつけ感動をよんだ大会】

○今年度も、大接戦が多く、大変、盛り上がりのある大会となった。特に、男子準決勝、決勝は、試合終盤のビックプレーにより勝敗が決まるなど、1点を争う好ゲームが繰り広げられた。

*男子準決勝 TBキッズ 対 愛宕東

大接戦の準決勝。4Q残り時間がなく同点の状況で、延長かと思われた瞬間、TBキッズ4番が、ハーフコート手前から狙ったシュートが決まり、ブザービーターで勝利。

*男子決勝 TBキッズ 対 発寒南

TBキッズが2点ビハインド残り数秒の状況、ターンオーバーから、TBキッズ4番ドライブからバスケットカウントを決め、その後のフリースローも沈め、逆転勝利。

○男子のベスト8は、札幌勢(3チーム)を中心に、旭川(2チーム)、北見、函館、滝川。
最終結果は、①TBキッズ(札幌1) ②発寒南(札幌2) ③愛宕東(旭川1)・恵庭柏(札幌4)

○女子のベスト8は、札幌勢(5チーム)を中心に、北見、帯広、函館。

最終結果は、①新琴似北(札幌1) ②山鼻(札幌5) ③上磯(函館1)・北見西(北見1)

○今年度は札幌勢の奮闘が光り、決勝戦は男女ともに札幌同士の戦いとなった。

最終結果も、男女ともに札幌1位が優勝をかざった。

1 今大会の大きな特徴

○日本ミニバスケットボール連盟からの「マンツーマン資料」を基にしたマンツーマンの推奨。

- ・日本ミニバスケットボール連盟より、今年度の全国大会をマンツーマン推奨で行うことが決定した。その予選である本大会もその規定が適用されたため、各地区も全道大会に向けて地区予選からマンツーマンを推奨し、全てのチームがマンツーマンディフェンスを採用した。
- ・マンツーマンが規定通り行われているかを確認する「コミッショナー」も試合ごと

に置かれ、助言を受ける場面もあり機能していた。

- ・ 審判員にもマンツーマンの規定が伝達され、試合中に選手に声をかけて、マッチアップを促すなど、コミッショナーと連携をして試合を進める場面が多く見受けられた。

2. 優勝チームの武器

○男子優勝・・・TB キッズミニバスケットボール少年団（札幌1位）

- ・ 4番の強力なリーダーシップ。鋭いドライブと正確なシュート、そして、しっかりとした身体つき。何よりも「絶対に勝つ」「自分が決める」という気持ちがプレーに表れていた。それが、準決勝のハーフコートからのブザービーターや、決勝戦残り8.4秒からの同点バスケットカウント、その後のフリースローワンショットにつながっていた。
- ・ 4番を中心に、それぞれの選手のよさが試合で発揮されていた。能力の高い5番の1on1、7番・10番のポストプレー、9番のファストブレイクなど。
- ・ アウトサイドからの1on1を中心に、インサイドに預けての合わせ、ハイ・ローなど、チームのねらいがオフェンスに表れていた。
- ・ 特筆すべきは、4番キャプテンの活躍がチームの原動力となっていた。

大接戦、大逆転の決勝戦。前半は、同点。第3QでTBキッズがリードするも、第4Qに発寒南のインサイドが力を発揮し、残り1分を切ってついに逆転。発寒南が残り16秒で2点リード。優勝まであと少しというところで、自陣からの発寒南ボールスローインをロングパスでねらってしまい、キャッチミスアウトオブバウンズでTBキッズボール。残り時間は13秒。自陣ゴール下スローインから4番がドライブを切って、シュートをねらうと、止めに入った相手インサイドの選手と接触。バランスを崩しながらもしっかりとゴールを狙って放たれたでシュートが決まり、残り8秒で逆転バスケットカウント！ 会場中が大歓声に包まれる決勝戦だった。心から両チーム選手の健闘に拍手を送りたい。

○女子優勝・・・新琴似北ミニバスケットボール少年団（札幌1位）

- ・ 持ち味は、トランジションとスピード。常にファストブレイクをねらい、速い展開でチームに勢いとスコアリングをもたらした。準決勝で苦しい試合を勝ち上がったのにも関わらず、決勝戦でも1試合を通して走り勝つ脚力は、よく鍛えられたものである。
- ・ オフェンスのフロアバランスが素晴らしい。リードガードの4番がフロアを整理し、効果的にパスを散らしていた。広がったスペースから他の選手がドライブをしかけたり、インサイドにボールを預けたりするなど、ハーフコートオフェンスも機能していた。
- ・ フロアに立っている選手は、ボールハンドリングがよく、正確な技術が身に付いていた。試合の終盤では、連続でアウトサイドからのシュートが決まるなど、ボールを扱うスキルを、しっかりと訓練されていることがうかがえた。
- ・ チーム最大の特徴は、トランジションバスケット。リバウンドからのファストブレイクは、チーム全員のねらいとなっており、少しでもディフェンスの遅れがあると、簡単にノーマークレイアップを決めてしまう。走る選手の走りだすタイミング、そこへパスを通すリードガードの視野など、全道各地のミニバスケットプレイヤーのお手本となるチームであった。

3. 今後、克服したい課題と考えられる点

○マンツーマンの綻びから、流れが変わる。

- ・マンツーマンの推奨となり、個人が責任をもって自分のマークマンを守ることが求められるようになった。さらに、2線目、3線目は、ヘルプにも意識をもたなければならず、選手や指導者が今まで以上に、マンツーマンに対して高い意識をもつことにつながっていった。
- ・試合では、自分のマークマンへの意識が高くなるあまりに、ヘルプが疎かになったり、2線目・3線目を意識するあまりに、自分のマークマンへのマッチアップが遅れてしまう場面が見受けられた。その遅れやズレから、ノーマークでシュートを打たれることにつながってしまったり、安易に味方のヘルプを呼び込んだためにディフェンスを崩されてしまったりすることで、相手のシュートが決まり、流れをもっていかれる場面が見受けられた。
拮抗した試合運びの中で、ディフェンスの綻びから、勝利を逃してしまう試合があった。
- ・逆に、隙のないディフェンスから、じわりじわりと流れを呼び込み、相手のミスに乗じて一気に流れを引き寄せるチームは、着実に勝利を重ねていった。
- ・マンツーマン推奨の基本的な視点は、個の力の向上であり、世界に通用するバスケットボール選手の育成である。こうしたゲームの流れの弱点や綻びは、今、問われている克服すべき課題であろう。マンツーマンをどのようなねらいで、どこまでチームに浸透させることができるかが、今後、大切に指導すべき点である。

○マンツーマン推奨を逆手に取ったオフェンス

- ・マンツーマンに対して、安易にアイソレーションを選択するチームもあった。アイソレーションも、オフェンスの一つの戦術選択ではあるが、ピリオドによっては、終始一人の力に頼ったオフェンスが展開されるチームもみられた。マンツーマン推奨は、各個人のオフェンス・ディフェンス両面でのスキルアップを目指しているものであることから考えると、アイソレーションでたった一人のオフェンススキルにチームが頼ることはいかなものだろう。オフェンスの2番・3番ポジションの選手の成長を促すものにならないのではないか。オフェンススキルを各個人に習熟させ、チーム全体でねらいをもって攻めるオフェンスづくりが望まれるのではあるまいか。